

I 研究の概要

1. 研究主題

自ら考え、共に深め合う子
～目的を明確にした対話的な学びを通して～

2. 児童の実態

本校児童は、誠実で明るく、自分の長所を積極的に伸ばそうとする児童が多い。一方で、友達と協力して一つのことをやり遂げたり、相手の立場に立って、よりよい行動をしたりすることが苦手である児童も多い。そこで、「主として他の人とのかかわりに関すること」についての道徳性を養うことで、友達と協力したりお互いのことを認め合ったり高め合ったりしながら、道徳的実践力を育成していく必要があると考えた。

このような本校の児童の実態を踏まえ、今年度の研究主題を「自ら考え、共に深め合う子」と設定し、主体的に学び合いに参加し考えを深めていく姿を目指していく。

3. 研究主題および副題設定の理由

さらに今年度は、副題を「目的を明確にした対話的な学びを通して」と設定する。「対話的な学び」とは、互いに自分の考えを表現し合うことで、考えが深まったり、新たな考えが生まれたりする学びと捉えている。対話的な学びをすることで、友達の考えとの共通点や相違点が明らかになり、友達との対話からより深く思考し、考えを深めていくことが期待できると考えたからである。

また、「目的を明確にする」とは、対話の目的があいまいなままでは、いくら対話的な学びを行ったとしても、拡散した考えが羅列されるにとどまり、互いの考えが深まったり、新たな考えが生まれたりしない。

今年度は、各教科と道徳の実践を通して、いかに目的を明確にするか、いかに対話的な学びをしかけていくかについて研究に取り組んでいく。実践を積み重ねる上での重点を、以下に示す。

4. 研究の重点

重点① 自ら学ぼうとするための工夫

道徳の時間は学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育の要の時間としての役割を担っている。各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動において、それぞれに目標が掲げられて実践されるため、地域や学校、児童の実態を考慮しながら、いかに道徳の時間において、補充・深化・統合を図るかが重要になってくる。そのためには、ねらいとする道徳的価値を教師が的確に把握し、道徳の時間で何を学ばせたいのかを明確にしなければいけない。さらに、児童が自己の生き方について考えを深め、道徳的実践力をつけるためには、児童が学びを自分のこととして捉え、意欲を持続させながら主体的に学んでいかななくてはならない。

そこで重点①を視点その1を「意欲を持続させる授業構成の工夫」とする。

また、意欲を持続させるためには、45分間の授業で学習のねらいが児童に理解され、ねらいを達成

するための学習の見通しを児童がもてていなければいけない。学習のねらいを方向づけるのは、授業の導入時に掲げられる課題である。この学習課題が児童の実態に合い、考える必要感のあるものであるならば、児童は自ずと主体的な学びに向かっていくものとする。

そこで重点① 視点その2を「自ら考えたい課題の工夫」とする。

重点② 目的を明確にした対話的な学びの工夫

対話的な学びを通して、互いの考えを深めたり、新たな考えを生んだりするような主体的な学びを創り出すためには、対話の目的が明確になっていなければいけない。目的が明確でなければ拡散した話し合いになってしまい、ねらいとする道徳的価値を自覚させることはできない。本時でねらいとする道徳的価値において、児童に教えること、児童に考えさせたいこと、互いの考えを対話させることで深めさせたいことなどを、教師は明確にしておく必要がある。つまり、毎回の道徳の時間が補充を意識した時間なのか、深化を意識した時間なのか、統合を意識した時間なのかを教師が意識して授業に取り組まないといけない。

そこで重点② 視点その1を「対話的な学びの目的を明確にする工夫」とする。

目的を明確にしても、児童が道徳的価値を自覚し、自己の生き方について考えを深められなければ意味がない。児童が何を学ぼうとしているのか、どんなことを考えればいいのかを児童が理解していなければ、主体的に学ぶことはできない。児童が主体的に学ぶためには、教師は「どんな思考を促すためにどんな発問をするのか」「こんなことを考えさせたいために、この資料をここで提示する」といった創意工夫をしなければいけない。中心発問や補助発問を通して、児童の思考が促され、ねらいとする道徳的価値を自覚し、自己の生き方について考えられる授業を構想していくことが求められる。

そこで重点② 視点その2を「対話的な学びを促す発問や資料提示の工夫」とする。

一時間の授業でできるだけ多くの人と対話を行い、考えを広げたり深めたりしながら、道徳的実践力を育ててほしいと考えているそのために、様々な学習形態を工夫することで、児童の考える幅をもたせていきたい。しかし、必要感のない中で様々な学習形態を取り入れたところで、児童は主体的に学ぶことはできない。何のためのペア学習であるのか、何を明確にするためのグループ学習であるのかを児童が認識できないと受動的な学習になってしまう。そこで、特に展開中盤で、中心発問後に、ねらいとする道徳的価値を自覚させる場で互いの考えを交流させる。考えの立場が明確になるように、違いをはっきりさせることで、交流する必要感も出てくるのではないかと考えている。

そこで重点② 視点その3を「対話的な学びを促す学習形態の工夫」とする。

資料等で学んだことを自分のこととして考え直した時に、自己の生き方について考えを深め、自己の生き方を内省することにより、道徳的実践力が育成されるのではないだろうか。つまり、展開後段や終末の場面で、学んだことをいかにしてまとめるかが、道徳的実践につながる道徳的実践力を育むために肝心な点であるとする。したがって、毎時間の道徳の時間で、つかませたい道徳的価値を児童がどのように理解したのかを、どのようにして教師が把握するのが重要になってくる。

そこで重点② 視点その4「学んだことをまとめる場の工夫」とする。

5. 研究構想図

学校教育目標

心豊かにたくましく生きる創造力・実践力に富んだ児童の育成

道徳教育目標

豊かな心を持ち、よりよい生き方をめざす子を育てる

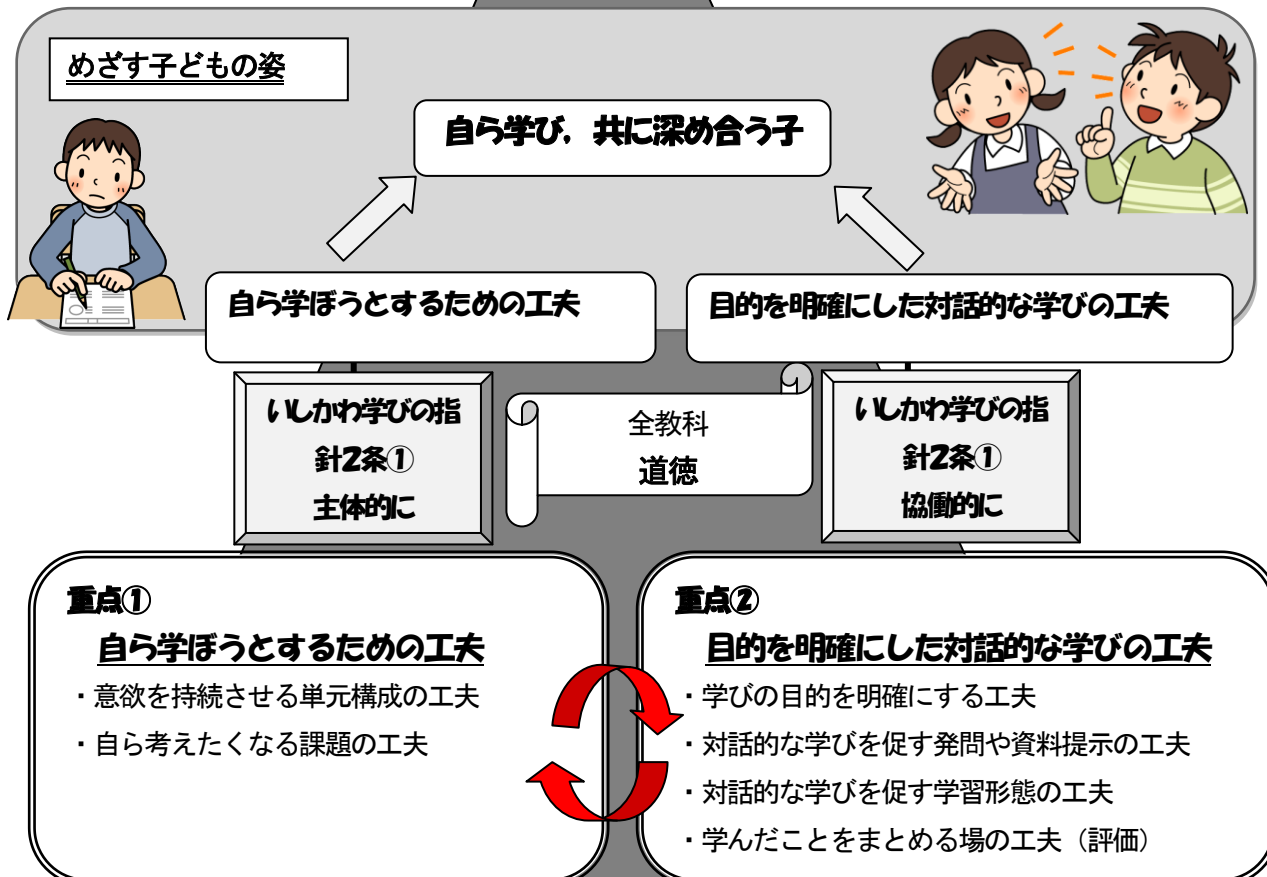
道徳教育重点目標

- ・自分の考えをしっかりと持ち、正しい行動のとれる児童の育成
- ・互いに信頼し、学び合いによって友情を深め、仲良く助け合う児童の育成
- ・生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する児童の育成
- ・働くことに喜びをもち、進んで義務を果たす児童の育成

〈 研究主題 〉

自ら考え、共に深め合う子

—目的を明確にした対話的な学びを通して—



生徒指導の三機能

自己存在感

共感的な人間関係

自己決定

6. 日常的な道德教育

今年度研究を支える日常的な道德教育の実践として、以下のことに取り組んできた。

①学んだ道德的価値を掲示によって共有すること

道德の時間でつけた道德的実践力をいかにして道德的実践につなげるかが重要になってくる。一時間の道德の時間で学んだ道德的価値を児童にしっかり自覚させ、自己の生き方を見つめ直すきっかけにしていく手立てを取らなければならない。その一つの手立てとして、道德掲示を行う。道德掲示を行うことで、毎時間に獲得した道德的価値を児童に共有させることができるため、道德的実践と道德的実践力の指導を行う際も効果的であると考えている。

②道德教育全体計画別葉の活用

道德教育は、学校の全教育活動において行われるものである。各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動において密接に関連させていかななければならない。しかし、各教科等で行われる道德教育は、それぞれの特質に応じた計画のもとで行われるものであるため、道德的な価値を自覚するまでには、教師の綿密な指導計画がなければ実現しない。

したがって、学校の全教育活動のどのような場において、道德教育との関連を図れるかを教師が俯瞰できる別葉の活用は欠かすことはできない。今年度様々な実践を通して別葉に加除修正を行いながら、より道德的実践力を育成できるものに変えていきたいと考えている。

③道德だよりの発行（職員向けと保護者向け）

今年度職員向けと保護者向けの道德だよりを発行する。職員向けは主に道德の時間の実践を全教職員で共有し、授業力を向上させる目的で発行するものであり、保護者向けは主に道德の時間で学習したことを保護者に知らせることにより、家庭と共に児童の道德性を高めていくことを目的としたものである。

二種類の道德だよりは、資料として掲載してある。参考にしていただきたい。

④道德の時間で学んだ道德的価値について保護者と共に考える機会をつくること

児童一人一人の道德性を高めていくためには、家庭との連携は欠かすことができない。学校で学んだ道德的価値について保護者とも話し合うことで、児童は再度身につけるべき道德的価値についての理解を深め、自覚することにつながっていくと考える。

学校の道德の時間での学びと、それを家庭に戻って保護者と考え直して得られる学びを繰り返すことによって、道德的実践につながる道德的実践力が身につく、さらに高められるのではないかと考えている。

家庭との連携で使用したワークシートや実践例についても、資料として掲載した。参考にしていただきたい。

7. 研究の経過

4月19日	道徳校内研修会 ～道徳の授業づくりについて～	助言者 金沢教育事務所 大塚 なぎさ 指導主事
6月9日	中学年ブロック研究授業 3年3組 渡邊めぐみ	内容項目 個性の伸長1- (5) 「うれしくおもえた日から」 助言者 金沢教育事務所 大塚 なぎさ 指導主事
7月12日	高学年ブロック研究授業 5年2組 小林 万佑子	内容項目 役割・責任4- (3) 「おもちゃのシンフォニー」 助言者 金沢教育事務所 大塚 なぎさ 指導主事
8月30日	指導案検討会 ～いしかわ道徳教育推進事業授業公開に向けて～	助言者 金沢教育事務所 (中・高学年) 大塚なぎさ 指導主事 (低学年) 橋本 直美 指導主事
9月30日	中学年ブロック研究授業 4年2組 滝川 真央	内容項目 勤労4- (2) 「バックヤードでも」
10月4日	フォローアップ3年目研修研究授業 2年1組 要 輝	内容項目 親切2- (2) 「ぐみの木と小とり」 助言者 県教育センター 粟生山 貴子 指導主事
10月6日	道徳研修会 ～道徳掲示の作成について～	重点を意識した実践をするために、掲示 を作成することで、教職員の共通理解を 図る。
10月13日	フォローアップ3年目研修研究授業 1年2組 村田 望美	内容項目 規則尊重・公德心4- (1) 「きいろいベンチ」 助言者 県教育センター 粟生山 貴子 指導主事
10月31日	全体研究授業 5年1組 小網 達也	内容項目 支え合い・感謝2- (5) 「緑の少年団」 助言者 金沢教育事務所 大塚 なぎさ 指導主事

8. 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

① 取組の重点について

ア 【重点① 自ら学ぼうとするための工夫】

◆意欲を持続させる授業構成の工夫

- ・ねらいとする道徳的価値を自分のこととして考えることができるように、授業の導入に児童にとって身近なテーマを取り入れた展開を考えたり、児童が資料の内容を理解できるように紙芝居やペーパーサートなどを使って登場人物の心情把握を行ったり、終末には登場人物に手紙を書く活動を取り入れることで自分の生活経験と結びつけながら考えられるようにしたりした。これらの手だてにより、友達のを考えを取り入れて、自分の考えを表出している姿が見られた。
- ・導入時にアンケート結果を示すことにより、ねらいとしている道徳的価値に対する児童の実態を共有することもできた。さらに、授業の展開部分や終末でアンケート結果をもとにして授業を進めたことにより、資料の中の登場人物の心情と自分の考えを比べながら意欲的に考えることもできた。
- ・授業の終末で考える内容について板書に吹き出しを使って示したことにより、児童が授業の最後まで意欲をもって学習に取り組むことができていた。

◆自ら考えたくなる課題の工夫

- ・ねらいとする道徳的価値について自分の行動をふり返ることで、学級の現状を全員で共有したことにより、本時で学習する道徳的価値に対する問題意識を高めることができた。この問題意識を本時の学習課題として位置付けることで、児童にとって考える必要感のある課題とすることができた。

イ 【重点② 目的を明確にした対話的な学びの工夫】

◆対話的な学びの目的を明確にする工夫

- ・重点①の「意欲を持続させる授業構成の工夫」で述べた「授業の終末で考える内容について板書に吹き出しを使って示したことにより、児童が授業の最後まで意欲をもって学習に取り組むことができていた。」について、教師がねらいを見据えて、意図的に吹き出しを設定したことで、ねらいとする道徳的価値を自覚化させる際の有効な手だてとなった。

◆対話的な学びを促す発問や資料提示の工夫

- ・資料の中心人物の心情を考える場面において、中心人物の言動の変化に焦点を当てた発問を設定することで、対話が促され、自分の考えを広げたり深めたりするきっかけにすることができた。また、「なぜ」や「こんな考え方もできるよね」などの問い返しやゆさぶりをすることにより、自分の考えを深く考え、新しい考えを生み出したり互いの考えを関連付けたりすることができた。

◆対話的な学びを促す学習形態の工夫

- ・心情円盤や心情曲線などを用いて考えを可視化した。互いの考えが可視化されたことにより、自分の考えとの共通点や相違点を明確にすることができた。さらに可視化した考えを目的に応じてペアやグループやフリー交流によって互いの考えを共有したことで、児童は考えを広げたり深めたりすることができた。
- ・一斉学習の場面でも、中心人物の心情理解のために役割演技を取り入れたことで、心情理解が促され、対話を生むことができた。一斉の場で、全員が同じ演技を見ているので、児童同士の対話も生まれやすく、互いの考えの共通点や相違点も明確になり交流させる必要感ももたせやすかった。

◆学んだことをまとめる場の工夫

- ・自分の考えをまとめる場として、書く時間を確保することにより、自分の考えていることを整理することができた。また、ふりかえりとしてワークシートに自分の考えを記入することで、自分の心の変容や豊かさを自覚することもできた。自分の考えが広がったり深まったりしたことを自覚し、道徳的実践力につなげるという点でも有効であった。
- ・学んだことをまとめる場として、授業の終末に『わたしたちの道徳』の活用も有効であった。授業の終末に『わたしたちの道徳』を使用し、学んだことをまとめる場とした。例えば、内容項目「正直誠実」であるならば、関連した話があるページを探しておき、そのページを全員で声に出して読んだり、教師が読んであげたりしたことによって、本時で気づかせたい道徳的価値に対する考えを全員で共有することができた。

② 道徳教育全体計画別葉の活用について

2種類の別葉を使用した。

一つは、**全ての内容項目と他教科との関連を一覧にした別葉(A)**で、もう一つは、**重点と他教科との関連をより意識して取り組めるようにした別葉(B)**である。平成30年度から「特別の教科道徳」にスムーズに移行できるよう、改訂学習指導要領の内容項目に準拠し作成した。

図1は、今年度5年生が使用している別葉(B)である。以下に、Bタイプの別葉の活用の仕方を示す。

図1 今年度5年生が使用しているBタイプの別葉

ア 活用の仕方

- ①低・中・高、各ブロックで道徳の重点目標を設定する。
- ①重点に関係する内容項目に関する項目のみを残し、それ以外は削除する。
これは、他教科との関連をより明確にして実践を積み重ねることができるようというねらいのもとで行っている。
(ただし、道徳の時間は太字で表し、重点に関わる内容項目を扱う授業が一目で分かるようにする)
- ①別葉をもとに実践する。

◆個人で

- ・重点目標達成に向けて、学校の教育活動全体で身に付けさせたい道徳的実践の指導の場を計画する。
- ・計画通りに指導できたかどうか振り返る。
- ・個人所有の別葉(B)に、指導した内容項目等をマーカーで記したり、指導した内容を付箋などを利用して貼り付けたりして残しておく。指導する必要がなかった項目は斜線で記す。

(図1に黒く丸囲みしてあるのは、新たに実践した内容を付箋に書いて張り付けたもの)

◆毎月の学年会で

- ・個人でマーカーや書き込み等が入った別葉を持ち寄って、学年用の別葉(B)に道徳的実践の指導内容を記録する。
- ・来月の各教科等の指導内容を見ながら、道徳的実践の指導が行える場を計画し、学年で共通理解する。

今年度は学期に一度の発行を目標に行った。定期発行にするか、それとも不定期発行にするか、何のための通信なのかをその都度確認しながら、児童の道徳的実践力を高める場として家庭の協力を得ることができるような連携の在り方を今後も検討していきたいと考えている。

ウ 成果について

今年度の家庭との連携についてアンケートをとった。結果は以下の通りである。

○家庭との連携の一環として学んだことをワークシートで考えさせたのはよい取組だった。

- いくつかの学級でうちの人のメッセージを目にした時、よい取組だと思った。うちのの人にも道徳を身近に感じてもらうことで、教科化へもスムーズに移行できると思う。
- うちのの人と話をしたことで、道徳的価値について新たな気づきを得た児童もいた。
- うちのの人にも道徳の学習を知ってもらえるよい機会になった。
- 授業では深く考えられなかったことを、家庭で話し合う児童も見られた。
- 家庭で親子の会話をする機会にもなってよかったと思う。

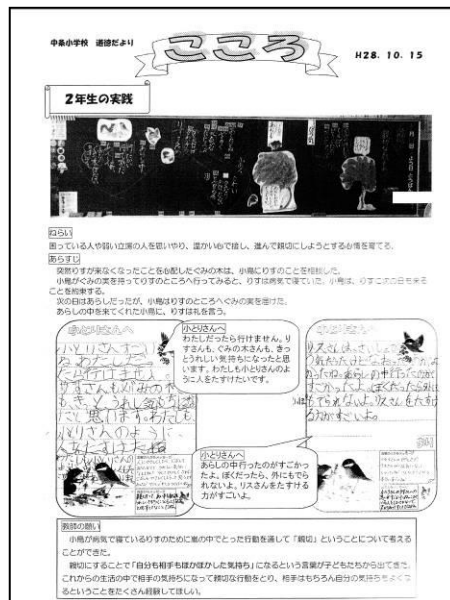


図3 道徳通信「ココロ」

うちのの人と話し合うことで、ねらいとする道徳的価値について再度考えることができたので、新たな気づきを得ることができた児童もいたようだ。うちのの人との会話をする機会にもなり、大変よい取組ができたと考えている。

④ 授業力向上のための校内での取組

ア 教師向け道徳通信の発行

道徳の時間で授業力を高めるために、今年度低・中・高、各ブロックで研究授業を実施し、そこで得られたことを職員の共通財産として残すことを目的として、図4のように、教師向けの道徳通信を発行した。

授業整理会で話題に上がったテーマを項目

立てて、実際に授業を参観した職員は再度学んだことを確認できるように、授業を参観できなかった職員にも本時の授業で得られた成果や課題が理解できるようにまとめた。

イ 成果について

教師向けの道徳通信についてアンケートをとった。

結果は以下の通りである。

- どのような内容で授業を行うとよいか等の参考になった。
- 評価するにあたりどんな手だてをとると評価しやすかったか等、情報交換は今後も有効だと思う。
- 道徳の授業について参観できなかった授業からも学ぶことができた。
- いろいろな先生方の研究授業の様子を知ることができて、非常に勉強になった。
- とてもありがたかった。
- 道徳だよりを読むと、日々の授業で実践してみようという意欲につながった。
- 授業を見に行かなくても手だてが分かりやすいし、自分の授業に生かした。



図4 教師向け道徳通信「道徳は自分の心と向き合い、豊かにする時間」

授業をつくる際の参考になったという意見が多かった。研究授業を参観できない時でも、通信を読むことで先生方と学んだことを共有し、共通実践につなげることができたことが成果だった。

⑤ 道徳アンケートから見る児童の意識

今年度「主として他の人とのかかわりに関すること 2-(3)信頼友情・男女協力」に関連する項目を重点として授業実践や日々の道徳教育を進めてきた。児童による道徳アンケートでは、以下のような結果が見られた。

・「人が困っているときは、進んで助けている」という項目では、肯定的評価(当てはまる/どちらかといえば当てはまる)は96.8% (4月), 100% (1月)であった。どちらも 高い数値であった。

【4年生】

・「人が困っているときは、進んで助けている」という項目では、肯定的評価(当てはまる/どちらかといえば当てはまる)は88%(4月), 83.7%(1月)であった。数値としては 微減してしまったが、「当てはまる」と積極的評価をした児童が18%(4月)から34.7 % (1月)とほぼ倍増していた。【6年生】

今年度の道徳に関する取組や日々の教育活動での学びによって、「誰かが困っている時は助けになりたい」という温かな心情が養われた結果であると考えられる。

今後も他の人と協力しながら、何かをやり遂げられるような経験を多く積み重ねることができるよう、道徳の時間はもちろん、日々の教育活動において、人とのかかわりを大切にして取組を前進させていきたい。

(2) 今後の課題と予定している取組

【今後の課題】

① 授業実践

・対話を通してねらいとする道徳的価値を自覚していく過程で、導入での意欲づけが大切であることが分かってきたが、そのためにどのような手だてが有効であるのかについて再度考えていく必要がある。

・道徳的価値を自分のことと関連させて考えていく場面では、互いの考えを「可視化」できる手段(心情円盤や心情曲線など)で対話をすることで、より考えが広がったり深まったりすることが分かってきたが、45分の授業のどの場面でもどんな時に対話をさせると効果的であるのかを再度考えていく必要がある。

・5年生に「道徳の時間では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいたと思う」というアンケートを実施したところ、「当てはまる」と回

	A…当てはまる		B…どちらかといえば当てはまる					
	4月		7月		10月		1月	
	A	B	A	B	A	B	A	B
5年	72%	22%	54%▼	38%	59%▼	36%		
6年	39%	57%	67%△	25%	58%▼	40%	42%▼	52%

図5 道徳アンケートに回答した児童の割合

答した児童は、4月では72%いたが、7月では54%、10月では59%に減少している。6年生でも7月では67%の児童が「当てはまる」と回答していたのだが、10月では58%、1月では42%に減少している。この調査の結果を受けて、資料の中の登場人物や中心人物の心情から学んだ道徳的価値を、対

話を通して自覚させるための手だてがまだ十分ではないことがわかってきた。自覚させたい道徳的価値を、児童が自分のこととして捉え直すことができるような深めの発問やゆさぶりの発問、資料提示のタイミング、思考を促す板書の仕方などを工夫していく必要がある。

- ・同じ項目で、肯定的な回答（A「当てはまる」、B「どちらかと言えば当てはまる」）を見ると、5・6年生はともに90%を超えていた。このことから、対話を通してお互いの考えを広めたり深めたりすることはできていたことがわかった。今後は、対話を通して学んだ道徳的価値を自分のこととして自覚し、児童の道徳的実践力をより高めていきたい。そのためには、道徳の授業でねらいとする内容項目についての教材研究をさらに深め、児童が対話を通して何を考え、どんな思いになっているかという内面を教師はイメージできなければならない。教材研究を通して、児童がなかなか気づけない道徳的価値を自覚できるような手だてを考えていく実践を積み重ねる必要がある。

② 道徳教育全体計画別葉の取組

- ・道徳教育において、別葉を意識することで、要となる道徳の授業と各教科や特別活動等各領域とのつながり、児童のよりよい人間関係の構築や豊かな学校生活への積極的な指導につながることを理解と実感が深まった。今後は、道徳の教科化に向けて、よりよい別葉の活用の仕方について全職員が共通理解する機会をとっていく必要がある。

③ 家庭との連携

- ・家庭との連携において、より効果的に連携できるように時期や回数などを検討したり、内容を考え直したりしていく必要がある。

【予定している取組】

- ・道徳の授業力アップのための研修
- ・来年度に向けての別葉の作成
- ・家庭との有効な連携の在り方について検討すること